

学生と教員で作る文理融合リベラルアーツFD公開フォーラム

全体討論

司会： 菅 聡子 (人間文化創成科学研究科 文科学系 教授)

加藤 美砂子 (人間文化創成科学研究科 自然・応用科学系 教授)

菅： 終了時間は、当初皆さまにお知らせしたとおりに収めたいと思っておりますので、お疲れとは思いますが、このまま引き続き 50 分まで会場で意見交換をしたいと思えます。

第 1 部の学生さんから、いろいろな非常に素晴らしい意見を出していただいて、いろいろな問題提起もあったと思えますが、ものすごく大きく分けると、二つのカテゴリーです。

一つは、やはり系列としての意味とかテーマとか、そもそも文理融合とは何かという、内容をめぐる非常に本質的な問い直しでした。もう一つは、時間割の都合上取れないという履修の問題ですとか、開講時に偏りがあるといったような、これは運用上の問題という感じで、これについては授業を提供している大学側が考えるべき措置、大学側の措置だと理解します。これについては、もちろん鋭意改善すべく努力していきますというふうに取りあえずは答えておきます。もちろんこれを含めてのことで構いませんが、特に学生さんの方からいろいろ出されていた、系列として取ることの意味、その他、それを中心に、皆さんからあらためてご質問ですとか、あるいはご意見。特に前半の学生さんたちが、後半の教員の発表を聞いていて、いろいろ言いたいこともおありではないかと思えますので、どうぞ遠慮なく、それぞれ意見が交換できればと思います。では、いかがでしょうか。

真島： 私は、「ことばと世界」の副代表ということで、浅田先生が先ほど代表として、「ことばと世界」には何も系列としてコンセプトとか、そういうものはありませんと言われましたが、立ち上がりの経緯から申しますと、四つぐらいの部分が、ほぼ最初から案としてあったわけです。それで、その残り、文学あるいは言語系ですか、そういったものと、数学と物理、情報という部分が余っていました。生物系とか化学系の科目がほかの系列に含まれることになっていまして、数学・物理系で何かつくりなさいというご意見もありましたが、私としては数学ですが、数学というのは普通の言葉と同様に、数量化されたもの、あるいは図形的なものを語る言葉であるという確信があります。そして昔、ガリレオ・ガリレイが「宇宙とはという書物は数学という言葉で書かれている」と。そういうことを言っておりましたから、そのことからすれば、「ことば」ということをキーワードにして文系の文学・言語系と一緒にするというのが分類的には一番よろしいと思えました。ですから、6 系列になるところが 5 系列になって、その代わり、この系列はすべて毎年開講という形になっているということです。



ですから、この系列としての目標は特になんかということではありますが、「ことば」について考えるという、大きな、当り前のことがあります。そしてそれは、単に便宜的にほかに分離したものがありますが、本来はそういったものも全部入っても構わないような大きな系列であると思っております。

私自身がこの授業を一つ担当しておりますが、それは数学を表に出さない、数学を振りかざしてする、基礎講義を振り替えたものとしては作らない。本来は、数学は見えないけれども、そこに数学が実はあるという形で、暦や、GPS というか、地図とか、インターネット取引、その中で安全性のための暗号であるとか、あるいは今日は金融工学とかをやりましたが、それからゲーム理論だとか、そういったものを数学を振りかざして定義するのではなくて、身近で、あるいは映画やテレビ番組から取り出すという形でやっています。以上です。

菅： ありがとうございます。フォローをいただきまして、大変助かりました。

取りあえずいろいろアトラダムにご意見やご質問等をいただきたいと思えます。もちろん今のことに結構ですし、違うことでも結構です。

学生 A： 先ほど発表させていただきましたものです。今おっしゃった中にもありましたが、現在 5 系列があると思えます。そもそもこの 5 系列というのは、どのようにして選定されたというのか。今はもともと案があったというようなお話でしたが、その案というのはどのような基準で選ばれたのでしょうか。どなたかお答えいただければと思います。

菅： どなたにしましょうか。三浦先生。

三浦：三浦です。私は昨年まで耳塚先生がなさっていた、教育担当の副学長をやっておりまして、リベラルアーツのスタートのときの責任者でしたので、指名を受けました。今の質問にお答えするついでに、少し歴史的な経緯を簡単にお話しした方がいいと思います。



前半の学生の方々の発表を聞いていて、私は二つの意見が出ているなどと思いました。一つは、系列ということについての意味があるかと。関連付けられると。それは文理という組み合わせもあるし、文系の中でも組み合わせができる。つまり、系列というか、関連付けられるという評価の一つです。「いや、受けてみたけれども、ちょっと無理があった」というネガティブな評価と両方あったと思います。

それで歴史的な経緯というのは、ではその前はどうかだったかという、これは3,4年生はご存じだろうと思いますが、基礎講義、基礎ゼミというものがもともとあって、それは名前のごとく講義とゼミというカテゴリー分けはありますが、関連付けはないわけです。極端に言うとナッシングです。もちろん基礎講義の中には、自然科学もあれば、社会科学もあれば、人文科学もあり、大きな大学ではそこのところをグルーピングしているところもありますが、お茶大は科目数が40しかないということもあって、関連付けがないのです。これではまずいだろうと。リベラルアーツというのは、単なるばらばらではなく、関連付けが重要だということで、文理融合という一つの関連付けを出し、それから系列という関連付けを出したのです。その関連付けを出したことが、現在、当然プラスとマイナスがあるわけで、それをぜひここで議論してほしいし、今議論になっているのだと理解しています。

その場合、二つの考え方があって、今の質問は、ではお茶大はどう関連付けたのかという質問でした。それについては当然授業ですから、教員ができることでないとできません。また、学生が関心があることでないと、やってもしょうがないので、私は非常に実践的に考えました。母体になったのは、一つは学生Aさんの話も出ましたが、前身に「コアクラスター」という科目群があったのです。そこである程度実験し、うまくいっているというものをまず決めていきました。それが「生命と環境」と「ジェンダー」です。

そういうふう実際にやれて、意味があるところから決めていきました。最終的な整理は、リベラルアーツのパンフレットに書いてありますが、一つは自然系です。それが「生命と環境」になるわけです。それからもう一つは社会系で、これは「ジェンダー」と「生活世界の安全保障」になっています。三つ目が、メディアという名前を付けましたが、自然と社会、人間をつなぐところにあるものということで「色・音・香」と、それから「ことばと世界」があります。「ことばと世界」というのは今、真島先生がうまく補ってくださったのですが、メディアという位置付けです。自然と人間をつなぐ間に介在するものというところで、ある意味では「色・音・香」と対になっているわけです。そういう設計になっています。

ただ、これが万全かという、万全ではなくて、実際には物質世界というテーマを立ち上げようと思ったわけですが、立ち上げられなかった。そこにいびつなところがあるのですが、学生の人たちに分かってもらいたいし、教員たちの間でも分かっていることは、実践的に考えるというところ。そのインデックスを利用して皆さんが学んでほしいということです。とはいえ、五つの箱に全部押し込むつもりはなくて、「残念だけど私はこの五つの箱には関心がない」という人は、系列を無理して取らなくていいと、だから系列を義務化していないのは、そこに理由があるわけです。

皆さんの履修傾向を見ると、系列でうまくいった人と、系列を飛び越えて見つけていった人と、残念だけれども系列でうまくいかなかった人と3タイプあると思います。

菅：ありがとうございます。今の経緯等、ご説明いただきましたが、それを受けてどなたか、さらにお伺いしたいこと、ご意見はありますか。

真島：先ほどちょっと言い忘れましたが、リベラルアーツを設計するに当たって、すべての基礎講義を全部LAに持っていくという議論もありましたが、それは私は明確に反対しました。そして、ある規則的、体系的に教えなければいけないもの、例えば基礎微積分学とか、そういったものは基礎講義として残すようにということを強く申し入れて、そのようになっています。ですから今、三浦先生が問題提起されましたが、基礎講義だけでいいという人ももちろんいるはずだと思います。

菅：多分、学生さんたちからは、「私たち、どう反応したらいいの」と思うかもしれませんが、どうぞこの場では遠慮なく感想などを言っていただきたいと思います。

先ほど実際の学生さんたちのお話や体験を聞いてみると、もちろん系列として取ることにすぐ意義を見いだして取った方と、逆に、あえてそれをばらけて幾つか取ったという取り方をされていた人もいます。でも、今度は系列を横断してそういうふう科目を集めても、それ自体が文理融合になっていることがあると。ですから、そういう可能性がいろいろ、むしろ学生さんたちが、先ほど実践的だということをおっしゃっていましたが、それとは違う意味で、実践してみたとき、あらためてこちらでは気付いていなかったようなことも見えてくるのかなと思ったのですが、いかがでしょうか。

学生B：先ほど発表させていただいたものです。ほかの学生さんの発表と先生方の発表を聞いて、印象として、学生の中で、リベラルアーツに対してどういう意義があるとか、どういう効果を狙ってとか。学生の中でも多分、理解に差があるとか。教員の方の中でも、こういう目的を持って、こういう効果を狙ってというのが、まちまちの理解があるのかなと思って。最初に「生命と環境」「ジェンダー」があって、自然社会、それをつなぐメディアとしてのテーマというものを聞いたら、それは「ああ、そうなのか」と思いますが、そういうことでテーマ設定されているということ、多分学生の方は、分かっている方が少ないと思います。もう少し全

体で、教員の方々の中でも、学生の方々の中でも、何か方向を一つに定めた方が、共通の理解を持って進めていった方がいいのではないかと思います。

菅： よくおっしゃいました。素晴らしい。これは教員側としては、答える責任ではないのですが、誰か応答があってもいいかと思います。例えば理解への差とか、温度差の話。学生さんが本当におっしゃりたかったことではないかという気もしますが、いかがですか。指名で、新井先生、いかがですか。

新井： 私も温度差はもちろん感じています。先ほど長谷川先生のお話の中でも教員側の切実な問題を吐露していただいたわけです。ですから、皆さんそれぞれ意識していると思います。

私は今日お話を伺って、例えば上村さんの例のように、むしろ系列が決まっているのだったら、系列を超えて取ってやろうではないかということは、もちろん積極的な学生さんなら当然やるだろうと思いました。先ほど三浦先生も言っていましたが、ある程度の緩さのまとまりは必要ですが、それを超えてみんなが自由に飛べる余地を残す必要があると思います。だからある程度の温度差は、むしろ意味があるだろうと思っています。

ただ、先生たちの温度差はいいと思いますが、理解の問題が一番問題だと私も思います。つまり、系列としてどういうことを考えるのか、お互いの科目間の関係をどうお互いに見ているかということの共通理解は、頑張ればできることなので、それはやはり会議を重ねてそれぞれの中でつくっていくしかない。でも、つくり始めたばかりですから、もちろんこれからやっていくことですし、現に2年もやっていて、まだできていないのかと怒られそうですが、徐々にでないとできない。われわれ教員側の意識改革が一番難しい問題で、われわれ自身が今まで教えてきた仕組みをわざわざ1回壊して、あるいは違うものを入れて、新たにつくって何かをやっていくなければいけないという問題ももちろんあるわけです。それから、まだわれわれ自身も目指すことを模索しているところはすごくあります。ぜひ、それならこういう見方はどうかとか、こうすれば考え方が変わるのではないかと行っていただいて、教員と学生皆でつくっていくのだろうと思います。

ただ、系列ごとにこういう共通理解があって、全部の系列が共通で、同じ理解でやる必要はどれも無いのではないかと今は思っています。系列の中でこれとこれとこれを取って完成するのだというコアクラスターから始まったところは非常にきっちりディシプリンができていて、目指すものがはっきりしていますが、それ以外のところは、まだどうやろうかというところで、先生方皆さんうちに帰って考えるのではないかと思います。

ただ、われわれは、今までは自分の授業をやっておしまいでしたが、系列でやっているのだからと集まって、くだを巻く回数もある程度出てきたので、これはいいことだと思います。あまり答えになっていませんが、目が合ってしまったので、失礼します。

菅： むちゃ振りをしてしまいました。ありがとうございます。

ほかに先生方からありますか。

荒井： 教務チームの荒井と申します。今日は貴重な意見というか、興味深く拝聴しました。事務サイドとして学生の皆さんに質問ですが、演習科目と基礎ゼミは、最初の紹介授業がオリエンテーションという形で2部に分かれて、それを聞いた上でクラス分けをしていただいているのですが、それは一体必要かどうかという実感として伺いたい。つまり、例えばこういうのがあるから自分が選べるとか、もしくはシラバスの段階で自分が取りたいものは決まっているから最初から授業がいいとか、そういう意見を聞きたいと思います。

菅： これは学生さん、どなたか。

学生 A： オリエンテーションということですが、私はオリエンテーションをしていただいてすごくありがたかったです。迷っていた授業で、取るかどうかとなったときに、その授業に実際出てみて、自分が知らないことの方が多かった授業だったり、ある程度雰囲気をつかめるので、むしろオリエンテーションをなくさないでほしいと思いました。

荒井： ありがとうございます。

菅： ありがとうございます。ほかの方はどうですか。

野口： 教育企画チームの野口と申します。学生さんに入学式や成績配布のときに LA のパンフレットが入っています。これを分かりやすいと言ってくださった方もいらっしゃったのですが、実際に学生の立場として載せてほしい情報、これだけは載せて、これは要らないというのがあったら教えていただきたいと思って質問させていただきました。

菅： これはどうでしょう。今、チームの皆さんからいろいろ、それこそ運用についてというか、実際に学生さんの相手をして、いろいろ登録等の話をする皆さんからのご質問です。先ほどのオリエンテーションを2回やるのはどうかということも含めて、いかがですか。こういう情報が載っていたらいいなという、何かありますか。後になって取ってみて困ったこととかありますか。「聞いてねえよ」という、それも含めてですが(笑)。あまりプラクティカルな点ではないですか。もしも後で思いついたら、メールするなり、お知らせいただければ、今後の運営に生かしていけるとと思います。

では、先ほどの、今、オリエンテーションは2回やっています。先ほど彼女が「私はよかった」というご意見でしたが、逆に「私は要らないと思います」というご意見の方、いらっしゃいますか。特に。

それでは、ほかにいかがでしょうか。

新井： 私がこれをもらったのは三浦さんからですが、学生の履修パターンという図を出しましたよね。人文・社会とか、physical と

metaphysical、personal と structural という軸の表をもらって、ちょっと科目を割り振らせていただいたのですが、それに対して長谷川さんは、基礎と応用、それから横軸が自然と社会、どちらに近いかというのを科目ごとにキーワードを付けてもらって、表を作る方が良いのではないかと。どうでしょう、学生さんたちはどちらが見やすいかを聞いてみたいのですが。

私の意見では、応用・基礎というのはよくないと思うのです。というのは、基礎と書かれると取りやすいと思ってしまうから、楽かなということで集中してしまうのではないかと。それから、いわゆる軸というのはいろいろあるわけですから、それで私は三浦さんが作ったこういう3分法みたいなもので、科目を大ざっぱに見せればいいのかと思いました。もちろん長谷川さんがやられたような科目ごとのキーワード、科目内のキーワードで見せるというのは、非常に斬新な試みで面白いと思います。だから、僕は「色・音・香」の場合は少し形をちょっと変えてやった方がいいかなと。僕は、あまり基礎・応用は好きではないというか、ベンチマークシステムみたいなやり方をはどうなんだろうと疑問に思っているのです。そんなことで見せるよりも、もうちょっと何か別の軸を見せた方が面白いのではないかと思ったので。でも、学生の受け取り方はどうかというのが一番知りたいところです。併せて検討していきたいと思いますので、またご意見がありましたら。

菅： どうでしょうか。何か。

学生 A： 何度もすみません。まず、表についてですが、すごく言いたいのが、学生になじみのない言葉は学生には分からないところで、特に横文字を使うのは、できればやめてほしいと思います。正直、人文とか自然とかも、多分大学に入ってから分けだと思っので、学生にとっては理系、文系ぐらいの大ざっぱな方が多分分かりやすいと思います。

あと、基礎と応用についてですが、私は基礎と応用はいいと思ったのです。なぜかというと、先ほど系列ごとに目指すところや方向性が強くていいみたいなお話もあったと思いますが、土台となる基礎の知識を得てから演習とかでもっと高いレベルに行っていきたいと思う系列もあるのかなと思って。あと、学生からしてみても、基礎と応用があれば、例えばこのレベルの基礎と同じような応用もセットに取ってみようということができるので、あと、問題集なども基礎と応用でよく見るので、身近な言葉で分かりやすいかなと思いました。

あともう一つ、マップについてですが、教員の方がこういう方向性を意識していますということなので、できれば実際に、せつかく2年間やったわけなので、キーワードとかも学生に挙げさせて、授業を受けてみて「この授業で一番大切だと思うキーワードは何ですか。三つぐらい挙げてください」みたいな感じでアンケートでも取るなり何なりして、学生が実際にどんなことを学べたと思っのかということも入ると、次の学生が分かりやすいと思います。

菅： ありがとうございます。学びますね、先生方。

1～2年生の方でどうですか。例えばこういうふうな方が、系列の中で取るにしても、あるいは自分でも組み立てやすいとか、組み合わせが分かりやすいとか、ほかにお考えがある方、いらっしゃいますか。どうぞ。

学生 B： 先ほどの何をパンフレットに載せてほしいかということにもつながると思いますが、履修するときに、授業ごとにどういう分野を、どういう方向を意識した授業かということが分けられている表が載っていると、履修するときに分かりやすいと思います。キーワードを分けたのも、それはそれですごく面白いと思いますが、例えばパンフレットに載せるときなどは少し細か過ぎて分かりづらくなるかなと思うので、授業ごとに分類するというのを学生向けに作るというのいいかなと思いました。

菅： ありがとうございます。さらにそういうものが説明会で配られるパンフレットなどにも反映されるといいということかと思っます。ほかにかがですか。三浦先生、後でもいいですか(笑)。では。

卒業生： 初めての方もいらっしゃると思いますが、私、2002年度入学、御校の卒業生として、この前身となったコアクラスター「ジェンダー」系の第1期生の履修生です。三浦先生や竹村先生の授業をその中で実際に受けさせていただきましたが、このリベラルアーツということを経験した上で社会に出るという観点から一つ、この系列や軸ということに関して、私の希望というか、願いというものをお伝えできればと思っしております。

先ほど先生がおっしゃってくださった軸の話、人文、自然、社会というのは、お茶大の一番強みの部分だと思います。実際にコアクラスターの系列の中も、お茶大の強みが生きている「ジェンダー」や、そういうものが多いのですが、実際に私がコアクラスター「ジェンダー」系で最も、授業単体としていまだに印象に残っているのが「企業・起業論」という、篠塚先生が当時ご担当されていました。内容としては、企業で働くこと、それから起業することという観点で、お茶大に専門分野としてないビジネスということのエッセンスを、実際に社会で働く先輩方のお話を聞きながら学ぶという講義でした。

結論といたしましては、やはりお茶大の強みというものを生かしていくために、このリベラルアーツというのはもちろん継続していただきたいのですが、その後に、ほかの大学の方と同じラインに立って比べられるという立場を皆さん必ず経験すると思っますので、そういう視点で、お茶大に特にない部分というのもの、こういうせつかくの機会を利用して学ぶ機会を今後とも持っただければいいかなと、卒業生として思っます。以上です。

菅： どうもありがとうございます。それでは。

学生 C： 私は先ほどのマップのことと、授業を、何を履修するかを決めるときに、どういう情報が欲しいかについてです。

マップは、初めてそういうものを見たので、まだよく分からない部分も多いのですが、マップ以外に私がいつも履修する際に知

りたいと思っていることは、授業の具体的に何をやるかという内容です。Web上のシラバスでよく見ますが、先生によって書かれている内容に差があって、すごく具体的に書かれていて、取りたいとか、知りたいと思える授業と、抽象的だとか、専門用語過ぎてよく分からなくて、よく分からないからやめようになってしまう授業があったので、それはもうちょっと書いていただけると興味を持てたかもしないと思いました。

あと、私は人間・環境科学科で理系の学生ですが、「生命と環境」系列はたくさん取っていますが、例えば「生活世界の安全保障」とか「ことばと世界」などの系列はほとんど、あまりパンフレットなどもちゃんと見ていなくて申し訳ないのですが、そもそも理系の学生はそういう分野にもともとあまり興味がないので、どうしても避けてしまうというか、「ことばと世界」といわれても、「ちょっと」と思ってしまう部分があるのかなと思います。理系の学生がそういう「ことば」にもっと興味を持てるような説明の仕方とかを工夫していただけたらいいなと思いました。今日の発表を聞いていて、こんなに面白い授業があったのならもったいなかったなとすごく思ったので、そう思いました。

菅：ありがとうございます。三浦先生、ちょっとお待ちいただけますか。

私からも一言、学生さんたちに伺いたいことがあります。文理融合とは何かというときに、どうしても教員サイドは授業を提供する側ですから、そのテーマだとか内容とか、物の見方がどうか、そういうことをどうしても考えがちですが、今日の皆さんのお話を聞いていると、文理融合というのは受講生の構成、つまり同じ教室に、同じクラスに、理系の学生さんと文系の学生さんがいて、そしてお互いに「こんなことを言うんだ」とか、「あんなことを考えているんだ」という、そっちの文理融合の方が、もしかしたら学ぶ機会としては学生さんにとっては重要なかと思いました。

そうすると、先ほどの新井先生のご意見・ご発表にもあったように、例えば受講が、今おっしゃったように、これは理系の私には向かないだろうという形で、最初から取らない。そうすると、非常に受講生が結局はそれぞれの専門に偏るといいます。文系の教員が出している授業には文系の学生が集まるということになってしまっているくらい強いんですね。そうすると、先ほど新井先生が旧基礎ゼミのことをちょっとおっしゃっていましたが、もしも、ああいうふうな多少制限が、つまり私のコースの人は、少なくとも私の授業は取れないと。そのような何らかの制限がもしも加わったとしたら、それはどうですか。やはり今のように全く何も無い方がいいですか。それとも全く自由に、それは学生に任せてくださいという方がいいですか。それとも多少あって、結果的に異文化交流のようになった方がいいのでしょうか。それはどうですか。

学生 D：私はやはり、自由に自分で、自分の講座だからこの講座は取れる、この科目は取れないとか、そういうのではなく、やはり自分の興味に合わせて構成とかを決めていきたいので、そういう制限がない方がいいと思います。系列とかも、学生も先生も何かすごくこだわっているというか、この系列だからこういう効果を出さなければいけないというのは、学生の方も、すごくみんな期待し過ぎていていると思います。でも、大学生なのだから、あまりそうやって、そういう大学側に何か求めることも大切だと思いますが、系列に依存し過ぎるのもよくないのではないかと思います。

菅：本当にリベラルアーツを学んでいただけたかという発言(笑)、まさにそういうことをできるようになっていただくためにこの授業を考えたのです。大変うれしいお答えです。でも、逆にちょっとあった方がいいかもという方がいらっしゃれば、もちろん言っていたきたいと思います。

50分に終わると言っておきながら、既に5時になってしまったので、三浦先生、まとめを兼ねて。

三浦：まとめにはならないと思いますが、学生の方の発表を聞いての感想です。

昨年も同じように、学生と教員がつくるリベラルアーツということで、こういうシンポジウムをやりました。そのときと比べると、去年は、実は発表していた人の多くが系列をほとんど意識しなかったということでした。9割ぐらいがそうでした。「え、そんなこと考えるの」と。今日は、私が非常にうれしかったのは、1年生の人、入って1年目の人が、例えば最初に高橋さんが、環境問題には自然と社会の理解が絶対必要なのだと行った。1年でここまで来てしまうのです。あるいは数学科の石井さんが、「ことばと世界」と「色・音・香」と取って何か関係する、それは先ほど言ったメディアということをつくっていたことが関係していたと思うのです。両方が輻輳し合った、関係し合った。そういう意味で、1年生の人がこういう形で、この段階でいろいろな発見をしているというのは、ものすごい進歩というか、進捗だと思いました。それが1点目です。

特にリベラルアーツが始まる前は、先ほど言いましたように基礎講義、基礎ゼミということで系列化していないということもありましたし、学生の履修動向を調べたら、基礎講義やコア科目について、コアが残っているとか、コアが終わったという言い方があったのです。多分、3,4年生の方はよくご存じだと思います。つまり、これはもうしょうがないから取っているという非常にネガティブな姿勢です。それと比べると、たった2年で全然変わってきていると思います。それはどう変わっているかという、皆さんが自分たちで何かを発見しようと主体的に、主題を持ってかかわろうとしたということが大きく変わってきたと。これは1点目です。

それから、2点目は既に出ていると思いますが、学科や学部を超えて履修するようになりました。専門科目でもそれほど怖くなくなつたと言っていましたよね。これも実は、かつてのコア科目のときに、履修動向を調べたら、生活科学部の子は生活科学部の先生がやっている基礎講義を取ってしまうのです。文教育の人は、文教育の先生と。つまり、またがないのです。そこでやはり意識的にまたが必要だと考えて、文理融合リベラルアーツという仕組みを考えてみたのです。そういう意味では、系列としてはうまくいかなかったという人も含めて、またぎだしたということは、もう十分な成果だと思いました。

それで、抜けているのは、リベラルアーツという言葉を使ってきましたが、その言葉について良くも悪くもすっきりしたのだけど、あまり議論がなかった。パンフレットには、これは私の造語なのですが、リベラルというのは「自在に」と訳し、アーツは「技」と訳しました。皆さんが生涯使っていただける自在な技を付けてくださいと。そのためには、領域をまたぐ必要がありますよというネーミングをしました。

そういう意味では、山下さんは、リベラルアーツが始まる前に一番先にそれを実践した人なのだろうと。あるいは今日来てくださった卒業生の方も、そういう人なのだろうという感想を持ちました。それはお茶大に全くなかったことではなくて、既にわれわれの中にあったものが、こういう形で顕在化してきている。学生の間にも教員の間にも見えるようになってきているという段階ではないかと思えます。

では、未来に対してこれから先、何をすべきかということですが、技術的な問題を考えなければいけないと思っています。今日聞いて二つのことが気になりました。一つは、先生が無理をしている科目があるということ。それは多少想像はついていますが、それについてどうしていくかということです。それはやはりスタートするとき、ディシプリンなのかサブジェクトなのかという議論があって、その学問ディシプリンのことだけで10は困ります。せめて2か3はサブジェクトを入れてくださいと言ったのですが、どうも10:0か9:1の方がいらっしゃる科目があるみたいです。それについては、やはり無理があるから科目の入れ替えを、今後リベラルアーツの部会の方で検討していくのか、あるいは先生と話し合っただけで変えていくのか、そういう作業が必要ではないかというのが一つです。

それからもう一つ、科目の取り方の問題としては、5科目取ると賞状といっても、あれは認定証ですが、それを出すということについて、逆にイージーになっているということがあったので、例えば文系理系を必ずどこかに入れるという取り方でない履修証明は出しませんという形で、少しハードルを高くして、このシステムを位置づけていくというのも一つの手だと思います。そもそも1クール、あるいは2クール終わったところで科目の入れ替えをしていくということは最初から考えていましたので、そういうことを教員の側で議論していただければと思います。以上です。

閉会

菅： ありがとうございます。最後にこれだけ言わせてという学生さんはいらっしゃいませんか。もしいらっしゃったら。

それでは、時間どおりに終わりますと言いながら、既に15分オーバーしてしまいました。申し訳ありません。しかし、非常にユニークな交流が持てたのではないかと思います。

最初の第1部で学生さんそれぞれから発表の中でいただいたご意見はもちろんのこと、今の議論の中で出していたご意見をすべてリストとしてまとめさせていただいて、4月のオリエンテーションの持ち方その他の検討の際に、すべて反映させて、こちらで出させていただきたいと思います。そういう形で第2ステージに入ると最初に耳塚先生がおっしゃっていた、この授業形態が、学生さんたちにとってより有意義なものになるべく、私どもも努力していきたいと思えます。

今日はお忙しい中、長時間にわたりましてご参加いただきまして、どうもありがとうございました。これで今日のフォーラムを終了させていただきます。



2010年1月20日(水) 13:00～17:15

お茶の水女子大学共通講義棟2号館101室